

■ 書 評



初期統合失調症 新版

中安信夫, 関由賀子,
針間博彦 著
星和書店
2017年6月 808頁
本体価格 9,000円+税

1990年に著者の一人、中安氏によって著された『初期分裂病』の27年ぶりの改訂版である。著者らによれば、旧版において「初期分裂病」という概念を1つの臨床単位として産み落としたが、その概念も壮年期に達しており、今回の改訂は旧版とは別の、全くの新書と言ってもいいほどになったため、あえて「新版」と銘打ったという。あとがきには、「私どもの固有の臨床経験が真に統合失調症の始まりの普遍を穿ったものとして、この病の早期発見・早期治療に資することを切に願う」という著者らの想いが綴られている。

本書は、序の「発病様式—進展経過—主病像から見た統合失調症の2種類とその模式図」と「I. 統合失調症の特異的初期症状研究を志した契機」「II. 初期統合失調症の臨床」「III. 補遺」の4部構成になっており、特に、「初期統合失調症の臨床」には全体の8割に及ぶページが割かれ、「示説例」「概念」「性比、発病年齢、初診年齢、遺伝負因」「症状」「診断」「臨床類型」「治療」の項目が並び、自験例282例における疫学や症状・経過、治療法について詳述されている。また、最後の「補遺」では、「1. 統合失調症の2段階病理発生仮説と抗精神病薬の作用点」「2. ARMS（発症危険精神状態）批判」「3. 初期統合失調症とアスペルガー症候群の共通と差異」という読者の興味を惹く話題が続いている。

本書の圧巻は、何といても各自験例における症状や診察場面の正確な記述であり、患者との一

問一答形式の記載は、その場に立ち会ったような臨場感がある。初期統合失調症の病態、特に、症状の形成とその進展課程に関する著者らの考えは、長い年月をかけて進化を続け、前書である『体験を聴く・症候を読む・病態を解く—精神症候学の方法についての覚書』（2008年、星和書店）や『統合失調症の病態心理—要説：状況意味失認—内因反応仮説—』（2013年、星和書店）で1つの完成の域に達したと感じていたが、今回は、その臨床的側面に特に焦点をあて、疫学や長期経過、類型、治療の詳細を明らかにしたことは大きな意義がある。さらに、長期経過の中で自殺に至った症例を綿密に検討し、治療者としてどうあるべきであったかに言及している部分は、精神科臨床に携わる全ての者が共有できる貴重な記録であり、その真摯な姿勢に改めて敬意を表したい。また、「初期分裂病」概念の提唱時には存在しなかった発達障害、特にアスペルガー症候群との異同に関する議論にあえて踏み込んでいることも実臨床を重視する著者らの守りに入らない、意欲的な姿勢が感じられる。これらの議論については賛否両論があると思われるが、著者らが長い年月をかけて熟成してきた「初期統合失調症」概念と同様に、今後、多くの臨床経験が積み重ねられていく中で歴史によってその答えが導き出されることであろう。

この種の成書としては珍しく、本書は講演形式にまとめられているため、スライドの図に重複が多数あり、分厚い装丁の仕上がりとなっているが、その割には一気に読み進められる印象である。著者らの診察に臨む真摯でかつ謙虚な姿勢や精神科臨床に対する熱い想いが随所に散りばめられており、初学者はもちろんのこと、経験豊富な一般精神科医にとっても統合失調症の臨床を今一度深く再考する機会を与えられる好著であり、一読をお勧めしたい。

(久住一郎)